中世プロヴァンス語における ラテン語 -ct- の発展形について

高塚　洋太郎

Bourciez, Éléments, p. 177–178 は，ラテン語，母音間の -ct- について，《L'évolution du groupe *ct*, qui n'a persisté nulle part,—sans doute à cause de la difficulté d'articuler deux occlusives de suite,—offre à elle seule un principe de différenciation très net pour les diverses régions de la Romania.》とのべ，中世ゴールの地域においては，《la difficulté fut résolue par le passage de *c* à une fricative, d'abord *x* sans doute, puis *y* (faxtu, d'où faytu). On peut admettre cette première étape pour toute la Gaule . . . Mais à partir de là, il s'est produit une scission. La plupart des régions . . . en sont restées à *-y t*: ainsi le N. de la France (fait, nuit), l'Auvergne, la Gascogne, . . . Ailleurs, au contraire, le y s'est combiné plus intimement avec le t, devenu alors t̯, tš : c'est ce qui a eu lieu . . . , au Sud de la France dans le Limousin, le Languedoc, une partie de la Provence (fach, nuech . . .)》と説明している。すなわち，一般にラテン語 -ct- は it ——この場合 i は前の母音と 2 重母音を構成する，がもし前の母音が i であればそれと融合して i (<i+i) に縮約される，たとえば dit (<dictu)——となるか，または主として書法 ch で表わされる音韻 -t̯, tš- に発展する。そしてプロヴァンス語の領域においては，*it* 型は Auvergne, Gascogne などの地域に現われ，*ch* 型は Limousin, Languedoc や Provence

の一部などの諸方言にみられる，というのである。しかし，まづここで，書法 ch が表わす音韻が t̆ または tš であるとする説には問題がある。さらに，it と ch の地域的な分布についての記述は，極めて大ざっぱな概略を示したものにすぎず，実際の状態はこれ程簡単，明確ではない。これらの問題を明らかにするためには，中世プロヴァンス語の文献に現われる書法を検討して，そのなかに隠されている実際の発音を推定しなければならない。主な資料として Cartulaire de Vaour（北東 alb. 方言に属する，1202年の文書）と Brunel, Chartes の Languedoc 地域に関する文書——これには Grafström の研究がある——を用いる。従って本論の主たる対象は中部 Languedoc 方言となるであろう。

まづ，Cartulaire de Vaour では -ct- に対して次の書法が現われる——(i) は前の母音が i の場合を示す。

I）母音間の例

it, (i)t :— faita (<facta) 55, 16, 59, 7, 61, 8, etc.（9例）; malafaita 16, 5, 6, 54, 3, 4, etc.（11例）; spleita(s) (<explicita) 30, 2, 73, 5, 77, 7, 82, 4, 100, 15; dreitura (<directu-ura) 50, 3, 64, 3, 71, 5, 72, 5, 80, 4, 99, 3, 100, 5; dreiturer (<-ariu) 80, 6, 96, 6, 98, 4; dreitureira (<-aria) 83, 13; Peitavis (<Pictavi) 85, 9; dita (<dicta) 108, 3.

ch, (i)ch :— facha 44, 4, 104, 14, 112, 2, 114, 5; malafacha(s) 17, 5, 6, 43, 3, 55, 16, 76, 7; splecha 14, 6, 33, 4, 37, 3, etc.（12例）; esplecha 87, 6; dichas 81, 7; sobredicha(s) 16, 6, 25, 5, 5, 55, 8, etc.（34例）; predicha(s) 108, 2, 5, 13, 14, 15, 20; condrechas 93, 4; gachas (<*wahta) 103, 3; Echer (<Hector) 81, 15.

ich ;— spleicha(s) 24, 5, 43, 2, 44, 3, 45, 5,

(i)ct :— dictet (<dictare) 105, 10.

Ⅱ）語末の例

it, (i)t :— fait 72, 3 ; befait 90, 4 ; dreit 16, 3, 3, 63, 3 ; dit 106, 13 ; sobreditz 92, 8 ; preditz 108, 11, 16.

t :— dret (<directu) 1, 4, 5 ; Benehet (<Benedictu) 110, 5.

ih :— faih 112, 11.

(i)th :— sobrescrith (<—scriptu) 1, 6.

g, (i)g :— Beneheg 111, 4, 8 ; dreg 3, 3, 87, 2, 8, 92, 4, 8, 110, 2, 111, 5, 112, 8 ; condreg 101, 3 ; fag 22, 4, 26, 4, 31, 4, 38, 9, 39, 3 ; fagz 10, 2 ; dig 104, 20 ; sobredig 14, 4, 15, 6, 16, 6, etc. (81例) ; sobredigz 36, 3, 40, 3, 6, 41, 3, 4, etc. (55例).

ig :— Beneeig (<Benedictu) 66, 3 ; faig 9, 4, 11, 4, 15, 5, etc. (19例) ; faigz 13, 4, 14, 5, 27, 4, etc. (18例) ; befaig 70, 7, 76, 5, 83, 8, 94, 1, 105, 3, 107, 12 ; dreig 9, 2, 10, 2, 20, 3, etc. (53例) ; dreigz 32, 3, 42, 3, 52, 3, 93, 4, 108, 4, 114, 4 ; condreig 106, 17 ; condreigz 79, 3 ; retraigz (<retractu) 53, 11, 106, 17.

(i)ch :— sobredich 18, 3.

(i)s :— dis (<dictu) 110, 4.

以上のなかで，dictet は学者語である，[kt] と発音されたに違いない——P. Levy, dechar 参照。dis (<dictus) は ditz の誤りであろう——このテキストには母音の後にくる語末の [ts] が s に縮約される例はない。sobrescrith (<-scriptu) は dith (<dictu) による類推形である。gacha (<*wahta) において，ゲルマン語 ht はラテン語の ct と音声的に同じ取扱いを受けることは周知の通りである。

Brunel, Chartes においても一般に同様の書法が用いられる。

Ⅰ）母音間の例

it, (i)t :— coita (<*coctare) 306, 23 ag.; faita 235, 2 quercy; predita 186, 4, 6 toul.; dreitureira 322, 10 alb.

(i)th :— ditha 276, 2, etc. quercy

(i) g :— prediga 232, 7, 12, 13 toul.

ch, (i)ch :— facha 228, 7 quercy; sobredicha 188, 14 toul.; trachas 238, 15 alb.; perfechament 211, 4 lod.

ich :— Eicher (<Hector) 292, 14 alb.

ct, (i)ct :— predicta(s) 310, 9, etc. toul.; octava 281, 10 alb.; sobredicta 141, 7 alb.

Ⅱ) 語末の例

it, (i)t : —Refait (人名) 306, 30 ag.; predit 145, 3 quercy; condreit 150, 2 toul.; guaraitz (<vervactu) 281, 9 alb.; forsfait 4, 5, 5 narb.; dreit 140, 3 S.-Pons; fait 87 lod.

t :— dret 23, 2 quercy ; 6, 3 alb.

g, (i)g :— dregs 306, 1 ag.; sobrescrig 239, 10 querey; sobredig 232, 21 toul.; fag 130, 10 alb.; dig 211, 6, 14 lod.

ig :— faigz 258, 12 quercy; destreig 203, 15 toul.; conduig 292, 12 alb.

ch :— Benech 228, 6, 12 quercy.

(i)th : —dith 278, 1 quercy.

しかしここでは，さらに，次の様な書法も用いられる。

Ⅰ) 母音間の例

j, (i)j :— condreja 189, 2 toul.; predija 325, 4 toul.; drejurers 194, 25 alb.

ih :— leiha (<lecta) 324, 5 toul.

hc :— trahca (<tracta) 218, 6, 238, 6 alb.

Ⅱ）語末の例

i :— drei 23, 2 quercy.

h :— befah 95, 20, 33, 37 quercy.

ith :— faith 277, 2, 3 quercy.

ç, (i)c :— *fac 228, 3, etc. quercy; predicz 233, 3 toul.; drec 56, 2 alb.*

以上のうち，drei（<directu）は dreit の誤りかも知れない（Grafström, p. 195 註5参照）—同じ文書のなかに dreit 2, 2, 3, 7; dret 2 がある。dret —Cartulaire de Vaour, 1, 4, 5; Brunel, Chartes, 23, 2; 6, 3—および Benehet（<Benedictu）—Cartulaire de Vaour, 110, 5—の -e- は -ei- の縮約形であろう（Ronjat I, p. 383《Pour les parlers qui ont *it*<*ct* intervocalique, ALF *la main droite, droit devant nous, étroite* indique des réductions encore plus étendues que dans le type *f-*~*hè*(*i*)*t*<*factu*, *-i-* se résorbant plus aisément dans [-ẹ-] que dans [-ẹ-]》参照）。Grafström, p. 197 は Brunel, Chartes の dret——1120年頃 quercy と1090年 alb. の文書に現われる——が dreit の縮約形である可能性を一応考えながらも，dreit が12世紀を通じて殆んどすべての文書に用いられるのに対して，dret は非常に早く現われ，爾後の文書には一例もないことを理由として，むしろ否定的である。しかし Cartulaire de Vaour の dret は1143年，Benehet は1199年の文書に出ていることに注目せねばならない。

Bourciez は ch が表わす音韻を [tš] および [t]——湿音の t，即ち [yt] と [ty] の中間音——とした。事実，中世のプロヴァンス語において，ch が [tš] を示す書法であることは広く一般に認められ，既に定説となっている——たとえば Appel, p. 80; Crescini, p. 27; Grandgent, p. 75; Schultz-Gora, p. 51 などを見よ。現在でも，toulousain, pays de Foix, montpellien, Rouergue など多くの方言で ch=[tš] である（Alibert, p. 25; Ronjat I, §51

参照)。しかし湿音の［ʧ］はどうであろうか。中世の Languedoc 方言において［ʧ］は実際に存在したであろうか。この点，一般に12世紀の文書において，湿音の n, l を示す書法のなかに，n, l, in, il, nh, lh があることが注目される。t, it, th はこれと一致するではなかろうか。しかし Cartulaire de Vaour では，湿音の n, l を表わす書法として n, in, (i)n, nn, inn, (i)nn, (i)ne, ng, ing, ngn, ingn, ign；l, il, (i)l, (i)li, ll, ill, (i)ll, illi が用いられ，Brunel, Chartes ではさらにこれらの他に ni, nh, gn, hn, ihn；lg, (i)lg, lh, (i)lh が現われている。この様に湿音 n, l を示す夥しい数の書法に比べて，同じ湿音を表わすにしては，問題の書法—t, it, th—は余りにもその数が少い——なお，Cartulaire de Vaour では nh と lh は用いなかった。この点からも sobrescrith の -th は湿音の t とは考え難い。この事実は，湿音の t が実際には存在しなかったことを意味するものに違いない。

ここで，K. Ringenson, Etude sur la palatalisation de K dans les parlers provençaux, Revue de Linguistique romane, 6, 1930, p. 31–90 について紹介する必要があろう。Ringenson はこの論文で，主として Brunel, Chartes を資料として，ラテン語 facta, factu, debeo, mediu, carrigiu, debea, media, totti および -aticu, -icu, -acu から由来する語を選び出し，ct, by, dy, gy, tti, tc, 子音＋c から発展した音韻を表わす様々な書法を，一方ではそれらの相互の間の，他方ではそれらの書法と湿音化した l, n を示す書法との，比較検討によって，問題の音価を推定した。まづ彼女は，書法全体を以下の様に分類する。

1)　kt＋母音——-ch-, -g-, -gh-, -h-, -ih-, -i-, -j-

2)　-kt——-ch, -g, -ig, -gh, -c, -h, -ih, -hc, -cg, -th

3)　dy, gy, by——a) -ch, -g, -cg, -c, -h, -y

　　b) -g, -i, -y, -ih

4)　-t+ī——-ch, -ig, -g, -ih, -h, -c

5)　-aticu——a) -atgue

b) -atge, -age, -aje, -aihe, -ahge, -atgie

6)　湿音の l ——a) -ll-, -ill-, -lh-, -il-

b) -ll, -lg, -il, -lh

湿音の n ——a) -gn-, -ign-, -ni-, -nn-, -nh-, -ne-

b) -ng, -ing, -in, -n, -nh

この様々な書法のなかで，まづ彼女は，全体を通じて g が最も多く，またどのカテゴリーのものにも共通的に用いられていることに注目した。この共通的な g をもって，写字生たちは何を表わそうとしたのか。彼女はそれを yod に他ならないと考える。そして，この yod ともう一つ別の何らかの要素——un autre élément difficile à saisir et à identifier —— とが組合わされたものを，写字生たちは様々な書法を用いて表現しようとしたのに違いない。そこで，たとえば，fag (<factu) において，問題の語末子音は [ty] に違いない，というのが彼女の結論であった。書法分析の厳密な理論と方法に基くこの結論に，われわれは賛成しなければならない。

以上，-ct- に対する様々な書法のなかで，it, (i)t, t は *it* 型を示し，その他の書法はすべて *ch* 型に属するとみることができる。*ch* 型の書法が多種多様であることは，ラテン語に存在しなかった特殊な音韻を表わすのに感じた写字生たちの困惑と同時に，その音韻自体が明確に定まったものでなかったことを示すものであろう。ch は [tš] か [ty]，そして両者の間を絶えず浮動していたものに違いない。なお，Ronjat II, § 311 によれば，現在のプロヴァンス語において，たとえば fach に対して faich の如く，ch の前に i を伴う形をもつ方言があるという——たとえば Limousin, Périgord, Provence の一部など。中世においても *faich* 型の存在した可能性は充分考えられる。とすれば，ig,

ich, ith などの i は，時に実際の発音 i̯ を示すものであったかも知れない。

前掲の表には示さなかったが，Brunel, Chartes のなかに男性単数対格，複数主格 および 中性主格 において -z をもつ 形 がある：—男性単数対格—traiz (<tractu) 243, 10 quercy；prediz 214, 3, 6, 215, 4, 5, 270, 4, 331, 3, 525, 3 toul.；dreiz 217, 1, 331, 4 toul., 55, 2, 7 alb.；sobrediz 525, 8 toul. 男性複数主格—diz 525, 3 toul.；faz 20, 64 alb. 中性主格—faiz 215, 7 toul.；sobrediz 331, 9 toul. など。これらの -z は [ts] を示す書法に違いない。一般に12世紀の文書において，語尾変化の規則は殆んど常に守られる (Grafström, p. 237 参照)。もし，これらの -z を用いる写字生たちの間に格変化を一様化しようとする傾向があったとすれば，それは常に主格に代って対格を用いることにある筈である。対格に主格が代ることはあり得ない。ところが，以上のなかで主格の代りに対格が用いられたとみられる例は，主格複数の diz と faz の 2 例だけで，他はすべて対格に代った主格の例である。この現象をどう説明するか。

Brunel は Brunel, Chartes, p. XIV において，《Dans les autres pays (即ち Comminges 以外の地域)，les fautes accidentelles dans l'usage de la déclinaison s'expliquent souvent assez bien par des raisons phonétiques. On sait que *s* de flexion s'adjoignant à une consonne chuintante finale, un groupe tel que *-chz*, difficile à articuler, peut se réduire à *ch* ou à z, d'où des masc. suj, sing, ou rég, plur, comme *fach*, *dreig*, *sang*, *frug*, *sobredig*, *meig*, *dig*, et un trouble dans toutes les désinences manifesté par des masc. rég. sing. ou suj. plur., *faz*, *tutz*, *prediz*, *dreiz*, et des adj. neutres comme *digz*, *faiz*, *sobreditz*, *escritz*.》とのべた。factu を例として，これを表示すれば次の様になる。

	男　性		中　性
	単　数	複　数	
主　格	fachs> { fach / faz	fach	fach
対　格	fach	fachs> { fach / faz	

まづ，この理論が正しいためには，fach，faz（<fachs）の両形が或る期間共存したことが前提となる。すなわち，すべての格に現われる共通形 fach が軸となって faz を他の格にも及ぼしたと考えねばならない。勿論，このこと自体はあり得ないことではない。しかし，Grafström, p. 199 は，もし fachs> fach—[fatš+s]>[fatš]—の現象が実在したとすれば，当時の書法のなかにそれを示す証拠がいくつも見出される筈であろう，ところが実際には，quercy の faith—男性単数主格—240, 16；276,17 が語末の s（又は z）を欠くこの種の唯一の語である，と批判し，そして ch は一般に [ty] または [tš] の音価をもつが，この [ty]，[tš] が時として [ts] に発展した，すなわち，s がついてもつかなくても ch は [ts] になる—[fatš+s]>[fats] および [fatš]>[fats]—傾向があったのではないか，との説を提案している。この点，現在の alb. および quercy 方言で ch=[ts] であることに注目すべきであろう（Ronjat IV, § 17-18 参照）。

Cartulaire de Vaour にはこの -z の形は存在しない。ところが，男性単数主格で，faih 112, 11；fag 22, 4, 26, 4, 31, 4, 39, 3；faig 9, 4, 11, 4, 15, 5, 18, 3, 19, 4, 20, 8, 21, 7, 28, 4, 29, 6, 34, 6, 38, 6, 70, 9, 74, 5, 79, 6, 89, 9；sobredig 15, 6, 97, 5, 114, 7.，男性複数対格で，sobredig 75, 2, 95, 3 がある——なお，男性主格複数 sobredigz 81, 9（aquestz IIII mases *sobredigz* . . . fosso, senes tota retenguda, alz fraires del Temple . . .）は格の混同—主格に代る対格形—の例であろう。まず，主格単数の faih, fag, faig,

sobredig は対格形の影響によって生じたものか。勿論その可能性は否定できない。しかし，対格複数の sobredig の存在によっても，これらの例がすべてそうであるとは考えられないであろう。次にこれは Brunel の言う faz に対する *fach* 型—[fatš] (<fatš+s)—を示すものであろうか。Brunel, Chartes において *faz* 型は12世紀全体を通じてかなりの数に上るのに対して，*fach* 型は faith 240, 16 ; 276, 17 のただ2例にすぎないことを Grafström は指摘した。しかもこの2例の現われる文書は12世紀の末—1189年と1194年—であることに注目したい。*faz* 型は12世紀の初めから現われる——faz 20, 64 alb. 1120年が最初の例である。したがって，fach>[fats] の現象は12世紀初頭から既に存在した，がしかし，それは未だ特殊な，個人的な発音であったのに違いない。12世紀中葉以後，*faz* 型の例の増加と共に，この現象は一般化しはじめる。12世紀末の faith の出現は，[fats] の発音が既にある程度弘っていたことを示すものであろう。この点について Grafström, P. 202 は，《Il se peut que les graphies pour le type *fach* . . . marquent quelquefois [ts] ou un phonème s'acheminant de [ty] ou [tš] vers [ts]. Si elles avaient en général la valeur [ts], on s'attendrait à une omission fréquente de s de flexion. Nous n'en avons rencontré que deux exemples querc., nommés plus haut (すなわち faith), qui peuvent aussi s'expliquer par une réduction de [tys] ou [tšs] à [ty] ou [tš].》と言っている。Cartulaire de Vaour で *faz* 型が1例もなく，s (又は z) を欠く *fach* 型が多数現われていることは，[ts] の発音がすでにかなり一般化されている事実を示すものとして興味深い。しかしさらに，Cartulaire de Vaour には，もう一つ ch=[ts] の発音が既に一般化されていたことを示す証拠が存在する。Ricarth (<hic-hard) 11, 1, 3(主格形) の -th の書法である。この場合 -th は -t(<d)+s=[ts] であって，[ty], [tš] を示すものでないことは明かであろう。一般に12世紀の文書において，*th* は

[tš], [ty] を示す書法であるに拘らず——たとえば Brunel, Chartes で, dith 278, 1 quercy; faith 277, 2, 3 quercy; ditha 276, 2, etc. quercy など, および Cartulaire de Vaour の sobrescrith 1, 6——, ここで [ts] のために用いられていることは, [tš], [ty]>[ts] の事実を証するものと考えねばならない。語末の ch が [ts] であるならば, 現在の alb., quercy 方言の場合と同じく, 既に母音間の -ch- も [ts] であったと考えてよいであろう。

なお, 12世紀の Languedoc の文書において [ts] の発音が存在した事実を明確に証明した功績は Grafström に帰さねばならないが, しかし中世プロヴァンス語における [ts] の存在を指摘した学者は彼以前にも幾人かあげることができる。たとえば, 既に Appel, p. 56, note 1 は, 《Für die schwankende Aussprache eines geschrieben *ch* (verschiedenen Ursprungs) spricht auch der Wechsel von auslautenden *ch* (bzw. *g*) und *tz*: *carrech* und *carreitz*, *correg* und *corretz*, *enueg* und *enueitz*》とのべ, また Chabaneau, Z final, p. 388 は, 中世プロヴァンス語の多くのテキストに現われる男性主格複数の toz (<totš<totti) について, 《Cette dernière forme, où *z* n'est autre chose que *tj* aiguisé (=ts) se confond naturellement avec *toz*=totus ou totos. Aussi a-t-on pu croire qu'il ne fallait pas l'admettre, et que tous les *toz*=toti que l'on rencontre sont autant de fautes; telle n'est pas mon opinion. Je pense que *toz* (=totti), étant une forme phonétiquement très légitime, doit être maintenue dans les textes anciens où il se rencontre avec une certaine fréquence. La présence simultanée de *tuit* ne saurait être un motif d'expulsion de *toz*, car on sait fort bien que l'ancienne langue admet dans un même texte l'emploi de formes multiples.》と言っており, さらに Ringenson, p. 84–85 も, 《A un moment donné, peut-être au XVIe siècle, peut-être antérieurement, du moins en certains endroits

de l'est, *dy* et *ty*, quelque soit leur origine, commencent à subir un déplacement en avont qui, tout en leur conservant une prononciation nettement mouillée, a amené une faible assibilation qu'on pourrait à la rigueur transcrire par ty^s, dy^s . . . Si l'articulation se déplaçait encore un peu en avant, il en résultait un *tsy* (*dsy*) nettement sibilant et qui, à mon avis, se dépalatalise rapidement en *ts* . . .》と説明している。

ch 型に s<de flexion> がつく場合は必ず -z が用いられる。Cartulaire de Vaour :— condreigz (<con-directu) 79, 3 ; dreigz 32, 3, 42, 3, 52, 3, 93, 4, 108, 4, 114, 4 ; fagz 10. 2 ; faigz 13, 4, 14, 5, 27, 4, etc.(18例) ; retraigz (<retractu) 53, 11, 106, 17 ; sobredigz 36, 3, 40, 3, 6, 41, 3, 4, etc. (55例)。Brunel, Chartes :— faigz 258, 12 quercy ; destregz 317, 12, 23 toul. ; dregz 194, 25 alb. ; frugz 221, 9 lod. など。これらの -gz が [ts] を示すことは間違いないと思われる。Grandgent, p. 89 は,《*disdūctum> desdüg, frūctum>früch, . . . Such words were very often written in the plural with -gz, which was pronounced either *ts* or *tš*. The pronounciation *ts* is attested by such rhymes as *malfagz* : *alumenatz*.》とのべている。Grafström, p. 202 も -gz=[ts] を認め,書法 -gz が用いられた理由を,《On a pu écrire *digz* p. ex. pour *diz* sous l'influence de *dig*.》と説明している。

以上,中世プロヴァンス語において,ラテン語 -ct- は *it* 型と *ch* 型に発展する。書法 it, (i)t は [i̯t]——ただし縮約形 (eit>et) もある——, ch, (i)ch, ich, (i)th, ith, g, (i)g, ig, j, (i)j, h, ih, hc, c, (i)c (そしてもし drei 23, 2 quercy が dreit の誤りでないとすれば i も)は *ch* 型,発音は [ty], [tš] または [ts]——ただし -s がつくときは必ず [ts]——,そして *ch* 型では時に前に i̯ を含むことがあり得る——たとえば,-ig は場合によって [ty], [tš], [ts]

または [i̯ty,] [i̯tš], [i̯ts] である——と結論することができるであろう。

Ronjat II, p. 177 は,《L'évolution du groupe instable engendre facilement des alternances, mais il est rare qu'elles se maintiennent: *fait*, *facha*<*factu*, *-a* est de règle à Die au XIIIe s., mais on trouve en 1325 *dich*, *dicha*>*dīctu*, *-a*. Les alt. du type *-it*/*-ch-* pouvaient en v prov. s'appuyer sur la préférence de *faitz*<*factus* et *-ōs* à *fachs* plus lourd; on conçoit d'ailleurs bien des évolutions purement phonétiques telles que -ct's>[-k't's>-yts], -ct [k't>č]; on rencontre fréquemment en v prov. un type presque régulier de flexion telle que *drech*<*d(ī)rectu* et *-i*/*dreitz*<*d(i)rectus*, et *-ōs*.》とのべた。この説明からすると,たとえば factu>fach となったときにも, factus, factos は, fachs [fatšs]>[fats] の過程を経ないで,直接に音声的発展の結果,[fats] となるわけである。そこで,factu ～ factus, factos の関係には 1) [fait] ～ [faits], 2) [fatš, faitš] ～ [fats, faits], 3) [fats, faits] ～ [fats, faits] の 3 つのグループが共存し得たことになるであろう。そしてこれらのグループの間で,共通形 [faits] を軸として, *it* 型と *ch* 型は相互に影響を及ぼし,両形の混乱を一層複雑化することになったものと考えられる。

Boèce と Sainte Foy では,どちらもラテン語 ct は必ず *it* 型で現われ, *ch* 型は存在しない—Rabotine, p. 71 及び Hoepffner, p. 83 参照。

Brunel, Chartes では一般に it, ch の両形が混合するが, bas-quercy および殊に alb. の文書では *ch* 型が多く,反対に Rouergue, Limousin では *it* 型が大勢を占め, toul. では両者がほぼ同数現われる。Cartulaire de Vaour では *it* 型が 50 例に対して *ch* 型は 334 例あり,圧倒的に多い。

Ronjat II, p. 171–178 および IV, p. 9–47 の記述によれば,現在の方言において, ch ～ it の地理的分布の状況は極めて複雑であり,地域的に錯綜して

いると同時に，また語の種類によっても変動する。しかし，大体において alb. と quercy では *ch* 型——尤も département du Tarn と Moissac では *it* 型も現われる——，toul. では *it* 型，そして Rouergue と Limousin では一般に *ch* 型——ただし *it* 型もかなり現われる——と言うことができる。

なお，Brunel, Chartes の Rouergue と Limousin の文書では，12世紀中葉までは専ら it が用いられ，それ以後 ch が現われて，12 世紀の末に至るまで次第にその数が増加する傾向を認めることができる——Limousin では dicha 36, 9(1140 年頃)，Rouergue では facha 78, 29 (1155 年) がそれぞれ *ch* 型の最初の例である。この事実は Boèce と Sainte Foy の it を説明するものと思われる。

略　語　表

alb. = albigeois

ag. = agenais

Alibert = L. Alibert, Gramatica occitana ségon los parlars lengadocians, Toulouse, 1935.

Appel. = C. Appel, Provenzalische Lautlehre, Leipzig, 1918.

Bourciez, Éléments = E. Bourciez, Éléments de linguistique romane, Paris, 1946.

Brunel, Chartes = C. Brunel, Les plus anciennes chartes en langue provençale, recueil des pièces originales antérieures au XIIIe siècle, Paris, 1926.

Cartulaire de Vaour = Cartulaire des Templiers de Vaour.

Chabaneau, Z final = C. Chabaneau, Du z final en français et en langue d'oc, revue de Linguistigue romane, 5, 6.

Crescini = V. Crescini, Manuale per l'avviamento agli studi provenzali, Milan, 1926.

Grafström = A. Grafström, Etude sur la graphie des plus anciennes chartes languedociennes avec un essai d'interprétation phonétique, Uppsala, 1958.

Grandgent = C. H. Grandgent, An Outline of the Phonology and Morphology of Old Provençal, Boston, 1905.

Hoepffner = E. Hoepffner, La Chanson de sainte Foy, Paris, 1926.

lod. = lodanien.

narb. = narbonnais.

Rabotine = V. Rabotine, Le 〈Boëce〉 provençal, étude linguistique, Strasbourg, 1930.

Ronjat = J. Ronjat, Grammaire istorique des parlers provençaux modernes, Montpellier, 1930–1941.

Schultz-Gora = O. Schultz-Gora, Altprovenzalisches Elementarbuch, Heidelberg, 1926.

toul = toulousain.

——関西学院大学文学部教授——